

琉球大学学術リポジトリ

海をテーマにしたトータル支援教室の取り組みを通して：受け止める姿・向かう姿から

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2015-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久志, 峰之, 大城, 麻紀子, 金城, 明美, 武田, 喜乃恵, 浦崎, 武, Kusi, Takayuki, Osiro, Makiko, Kinjyo, Akemi, Takeda, Kinoe, Urasaki, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31074

海をテーマにしたトータル支援教室の取り組みを通して

— 受け止める姿・向かう姿から —

久志峰之¹⁾ 大城麻紀子²⁾ 金城明美³⁾

武田喜乃恵⁴⁾ 浦崎武⁴⁾

Total Support Group which planned the sea

— It begins to move from itself. —

Takayuki KUSI¹⁾ Makiko OSIRO²⁾ Akemi KINJYO³⁾

Kinoe TAKEDA⁴⁾ Takeshi URASAKI⁴⁾

要約

琉球大学発達支援センターによるトータル支援では、海をテーマにした企画を行っている。企画内容は、見立ての活動の中で子どもが青い海をイメージして作品や場を制作したり、活動したりするものや実際の海で活動をするもの等である。子ども達は、企画活動に参加し、企画の内容や支援者の動きや言葉によって、会話を広げ、様々な表情や行動をみせる。活動中、海で遊ぶイメージを持つ瞬間や海に触れる瞬間、海を見る瞬間に、能動的な姿勢や動きが表出し、向かう力の前提となる受け止める力を伴う姿が見られてくる。

このような活動の一瞬一瞬から、社会性に乏しいとされる発達障害の子ども達が、トータル支援教室の中で受け止める力・向かう力が育まれている様子が垣間見える。

本研究では、海の企画を通して、子ども達が、ものへ、人へと向かう力を伴って活動する姿を検証する。

I はじめに

1 「青い海」の自然に向かう

沖縄の海は、透明感のある「青い海」である。久志ら(2013)は、「海は、島国である日本にとっては、とても身近で親しみやすい場である。」と述べている。日本の海の中でも特に沖縄の海は、透明感があり、海底まで見える。この沖縄の「青い海」は、ともすれば深く暗く、恐れさえ感じさ

せる海の表情を和らげ、安心感を与えてくれる。「青い海」の安心感には、他地域で味わえない穏やかな心地よさがあるのだ。

塩の香りや輝く波、かすかに動く青と白い雲、波際に近づくと透明な海水が足元で戯れ、触れる肌に心地よさを感じさせる。さらに海に入ると色鮮やかな魚達が笑いを誘う。このような海をイメージするだけでもワクワク楽しくなる。行ってみたい、海で遊びたいと浮足立つ。

¹⁾ Naha Juvenile Classification Homes

²⁾ Morikawa Spe. School, Okinawa Pref

³⁾ Nagata Ele. School, Ginowan City, Okinawa Pref

⁴⁾ Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

発達支援を要する子ども達にとっても、身近で親しみやすい「青い海」との出会いや「海」での活動・企画は、興味関心が高いものであることを確認してきた（浦崎ら、2013、2014）。久志ら（2013）が、「青い海の遊びの幅広さと楽しさ」で述べているように、トータル支援教室に参加しているほとんどの子ども達が、海の企画に目を輝かせて参加し、予想以上の効果や思いがけない行動を引き出すことがこれまでにあった。

これまでの様々な海の企画では、集団の場が苦手な子、海や水が苦手でなかなか活動に参加できなかった子たちも、まわりで活動を楽しむ仲間や場の雰囲気促され、自分なりの参加の仕方ではあるが、気がつけば企画に参加していたということが多く見られた。活動する子どもひとりひとり違う参加のしかたが見られたのだ。

これは、海が、海面、海中、海底、砂浜、港、海岸などなど、様々な場面でいろいろな遊びの場を作ることができる懐の広いところがある所以ではないだろうか。

このように懐広い「海」でトータル支援の活動を行うことで、人と関わること、見通しの持ちにくい活動に参加することが困難な子ども達が自分なりのやり方で企画や人へと向かう力を育み、海という広い場を受け止める力へとつなげることが考えられる。

2 向かう力を動かすトータル支援での海企画（目的）

トータル支援教室では、これまでいろいろな企画で集団支援を行ってきた。浦崎ら（2012）が、「発達障がい児への他者との関係性を基盤とした集団支援」の中でトータル支援教室の支援構造や支援方針で述べているように、企画は、子どもの興味関心のある内容で、支援者と子どもというユニットで活動することで、子ども達が自然に人と関わりを持つように設定し、また、子どもがこれからどのような活動をするのかイメージしやすい構造の場であることが必須条件として考えられる。

したがって、今回検証する屋外のキャンプという形で行われた「海」の企画も同様に、ユニットをつくって活動に対しての見通しが持ちやすく、安心して遊ぶことができるものとして計画した。

また、キャンプは、海の企画ではあるが、まず、子ども達が不安なく安心して参加できることを念頭

に、段階をおって海に近づくための場を用意し、屋内での見立ての活動から屋外での見立ての活動を経て、実際の海に触れる活動ができるようにした。

子どもの興味を引き、かつ、安全な環境の中で行われる自然体験は、安心して「海」に触れる気持ちを育て、水に触れることが苦手で、経験したことのないことへ向かうことを躊躇させる気持ちを和らげ、自信を持って活動しようとする気持ちを子ども達の中に芽生えさせるだろう。

そして、ユニットで活動することで、自分のペースで企画に参加し、必要な時に、あるいは、気持ちが向いた時に自然に人とのつながりを持つことができるようになる。

つまり、トータル支援教室のキャンプでの「海」企画の目的は、子どもと「海・自然」、子どもと支援者、そして、子ども同士のつながりを重視した発達支援である。

日常生活でほとんど関係を持たない、子どもと「海・自然」、子どもと支援者、あるいは、子ども同士が、短い期間で関係を持ち、つながっていきこうとするための媒介として「海」企画が存在するのである。

そこで本研究では、トータル支援教室での活動としての「海」企画において、企画の持つ力、場の構造、そして、支援者と子ども達との関係性（ユニットの力）によって、子ども達が能動的に「しようとする」気持ちを持ち、実際に「動く姿」「向かう力」を見せる様子を事例を挙げながら検証していきたい。

II 方法

ここでは子ども達の他者との自然発生的で、偶発的な場面のエピソードを重要視、子ども達の具体的な言動を、支援者の行動観察記録およびビデオ記録を用いて、記述する。

キャンプでの具体的な企画と3名の子ども達の実際の様子を記述する。

海企画の紹介、目標、中北部地区での取り組みについて以下に記載する。

1 「海」の環境で（身近な目標）

<海企画の紹介>

子ども達にとって身近な存在である「海」は、自分の経験からファンタジーに入りやすく、その子なりの活動を転換しやすく、

また、『海』をテーマに多様な企画が考えられるのも魅力である。

単純に泳ぐことをイメージした企画だけでなく、すいかわり、たきびなど、砂浜で遊ぶ企画、釣りや潜水、舟遊びなど、海上、海中での企画、さらに、夏の海、冬の海といった季節から海をイメージした企画といったいろんな企画を準備することができる。そして、その企画への参加もひとりで、ユニットで、集団でと、多様な参加の形が可能である（写真1・2）。



写真1 実際に海・川で遊ぶ



写真2 どろんこクルージング

それから、海の企画では、水田・ブルーシート等を、深海・海水・砂・泡や波に見立てる等、素材を用いての感覚遊びから、浮き輪やカートを利用した水上車、舟で行く修学旅行など、発達年齢に合わせた海での遊びをイメージした活動と、幅広い活動ができるのである。

したがって、海は、子ども達にとって身近にある自然の公園なのである。

『海』の企画は、イメージしやすさ、親しみやすさ、活動の多様性などから、子ども達が、活動の場そのものだけでなく、活動を共有する人へと

向かう力を育みやすい企画である。

『海』という公園で、ストライクゾーンの広い活動ができることで、子ども達は、自分だけの世界からつながりのある世界へと意識を向けやすくなる。それが、『海』の企画の魅力である。

これまでに、トータル支援教室では、琉球大学構内や八重山教育事務所内で部屋を海に見立てた企画を13回、野外での企画を4回の計17回の『海』の企画（表1）を行った。

2 中北部地区トータル支援の企画について

2011年から始まった中北部地区でのトータル支援であるが、夏休み年1回、金武町のネイチャーみらい館でこれまでに4回行ってきた。

大学の定例の支援教室に参加している子ども達5～7名程度に加えて、中北部地区の小学校の子ども達2～3名、支援教室の卒業生1～3名とその保護者が参加している。支援者としては、学生、教員などが参加している。子ども、保護者、支援者を合わせると毎年30～40名程度となる。

定例の支援教室は、基本的に室内で行っているが、中北部地区でのトータル支援野外の自然環境を活かした企画を第1回目と第3回目は、メイン企画に泥んこクルージングを行った。第2回目と第4回目は、メイン企画にカヌーを行った。また、保護者と支援者が参加し、近況報告や情報交換の会を設けている。

III 企画と子どもたちの様子と考察

1 キャンプでの具体的な企画

(1) 泥んこクルージング

① 企画：どろんこクルージング

どろんこクルージングは、前半は、クルージングをするための舟を制作し、後半は、制作した舟を泥んこの中に浮かべて、その中に乗って楽しむ企画である。

1回目の企画では、支援者は、前半の制作に使う材料として、ペットボトルと段ボールを用意した。用意された材料を使って、子どもと支援者がユニットで舟を作った。どのような工夫をしたら舟になるのかわからない子どもには、支援者がアイディアを出して作った。段ボールを切る時は、普通のカッター以外に、安全に切れるようにダンボールカッターとハサミを用意した。ガムテープをうまく貼

表1 トータル支援教室で行った『海』の企画

回数	年	月	企画名	場所	形態
1	2011	3	みんなで海をつくろう 海であそぼう	八重山教育事務所	見立ての活動
2	2011	6	ベタベタコロコロうみのせかい	八重山教育事務所	見立ての活動
3	2011	8	日帰りキャンプ（どろんこクルージング）	金武町のキャンプ場	野外活動
4	2011	10	へんしん！しんぶんし！	八重山教育事務所	見立ての活動
5	2012	6	海の世界へレッツゴー！海であそぼう！	八重山教育事務所	見立ての活動
6	2012	8	日帰りキャンプ（カヌーで冒険）	金武町のキャンプ場	野外活動
7	2013	2	冬の海へレッツゴー	八重山教育事務所	見立ての活動
8	2013	5	ギョ！ギョ！！ギョ！！ ビックリ水族館 IN 琉大	琉球大学構内	見立ての活動
9	2013	7	ギョ！ギョ！！ギョ！！ ビックリ水族館 IN 八重山	八重山教育事務所	見立ての活動
10	2013	8	琉大★海底探検！	琉球大学構内	見立ての活動
11	2013	8	日帰りキャンプ （どろんこクルージングパート2）	金武町のキャンプ場	野外活動
12	2014	2	海底探検in八重山	八重山教育事務所	見立ての活動
13	2014	5	海であそぼう！～風と水の女王～	琉球大学構内	見立ての活動
14	2014	6	海であそぼう！新聞びりびり	八重山教育事務所	見立ての活動
15	2014	8	日帰りキャンプ	金武町のキャンプ場	野外活動
16	2014	9	海のおまつりワールド ～海人になってみよう～	八重山教育事務所	見立ての活動
17	2014	10	海であそぼう！タコクラゲ!?バルーン	多良間保育所	見立ての活動

れない子には、必要最小限で支援者が手を貸した。

企画の後半は、田んぼを泥の海に見立てて、作った舟でクルージングをした。クルージングが終わっても遊べるように、田んぼに浮き輪を浮かべたり、綱引きができる大きな綱を用意したりした。田んぼのそばにはブランコがあり、田んぼの中に滑り降りられる大きな滑り台もあった。泥んこが苦手な子は、ブランコに乗って楽しんだり、田んぼの周りを支援者と鬼ごっこしたりした。また、田んぼの周りには、雑草があり、バッタや蝶などの昆虫がひそんでいるので、虫取りをして楽しむこともできた。

トータル支援は、ユニットで活動するので、子どもが自分から田んぼに入るまで、支援者は、子どもに寄り添い、子どもの活動を時には見守り、時には促して、子どもなりの参加を支援した。子ども達は、周りの反応や支援者の促しを受けて、田んぼの中の活動に興味を持ち、気持ちが向かい、気がついたら自分

も泥んこになっていたという経験をしていた。

② 企画のエピソード

子ども達は、ユニットを組んでいる支援者と一緒に、用意されたペットボトルと段ボールを使って自分が乗る舟を作った。

トータル支援が用意したのは材料だけで、舟の設計は、各自に任された。子ども達は、個々のイメージする舟を作るのだと知り、作る前から身を乗り出し、目を輝かせ、自分の舟が水面を走ることを想像し、満面の笑みを浮かべて作り出した。

初めにペットボトルをいくつもつなげてガムテープでしっかり固定し、その上に段ボールで自分の乗る舟室を作る者。最初は、漕ぐためのパドルを用意して、それから段ボールの舟を作り出す者。自分がじかに座って乗る部分の大きさを確かめる者。子ども達は、自分のイメージを膨らませながら舟づくりに熱中していた。

自分のイメージをしっかり持っていて、支

援者は一緒にガムテープを付けたり、段ボールを切る子供の補助はすることはあっても、舟の設計には、ほとんど口を挟ませず仕上げた子どももいれば、支援者との対話の中で、設計を修正しながら仕上げた子もいる。また、子ども同士相談して二人で舟づくりをはじめ、そこに支援者が加わり完成させた子もいた。

それぞれの舟が完成すると、制作完成披露会をした。披露会は、カヌーのイメージで作って、舟の中でパドルを手にポージングしたり、作った舟に「合格号」と名付け、「浮けば高校合格する。」と願をかけたかたり、自分の舟はちゃんと浮かぶ工夫をしたとほくそえんだり、子ども達ひとりひとりの思いを披露しあう会にもなった。舟の披露が終わると、いよいよクルージングの時間だ。

子ども達は、支援者と一緒に自分の作った舟を担いで田んぼまでの道のりを歩いた。歩いている途中は、浮かべる舟の話題もあれば、道端にバッタや昆虫を見つけ、その動きに夢中になるなど、のんびりとピクニック気分での道行となった。

みんなの舟を全部浮かべてもゆったりとクルージングできそうなほど広い田んぼにつくと、ほどなく、舟の進水式がはじまった。

勢いよく舟を浮かべてバランスをとりながら舟に乗り込む子どもがいた。舟は、支援者が支えている間は浮かんでいたが、子どもが乗り込むとすぐに沈んでいった。周りで沈む舟を見て、自分の舟に乗りたがらず、田んぼの周りを歩きながらクルージングしている子ども達を眺めているだけの子どももいた。支援者の何人かは、「合格号は？」と気にし、その舟に注目していた。思いを込めて舟に乗ると、少しの間、合格号はしっかりと水面に浮かんでいた。息をのんで様子を見守っていた支援者は一様にほっと息を漏らした。

泥んこに入れない子は、支援者と一緒に田んぼの周りで虫を見つけたり、追いかけてこをしたりして楽しんでいた。最後まで田んぼに入ることはなかったが、田んぼから離れることもなかった。時折、田んぼの中の様子を目を細めて見ながら微笑み、支援者に耳打ちする姿が印象的だった。

田んぼは、つかの間、泥んこの海になり、舟で遊んだり、泥んこの海で泳いだり、泥ん

こ綱引きをしたりして楽しむ子ども達の笑い声であふれていた。

クルージングが終わり、泥に沈んだ舟の残骸を引き上げると、小3の子どもの肩くらいの高さになり舟のなれの果てがこんもりと山になっていた。

2回目のどろんこクルージングは、1回目の沈んだ舟を何とか浮く舟にしたいとの思いから、段ボール、ペットボトルに加えて、浮き輪を材料として用意した。浮き輪は、一定の効果を上げ、1回目よりはどの舟も長く浮いていた。

(2) カヌー体験

① 企画：カヌー体験

1回目のカヌー体験では、前半でカヌーに装着する旗を作成した。絵を描くことが苦手なこのためにシールなどで装飾できるよう準備していた。

カヌー体験を始めるにあたりインストラクターからパドルの操作法などを全員で教わった。子どもたちは皆上手にインストラクターの見本の通りまねができていた。しかし、いざ漕ぎ出すとやはりぎこちない様子が見られた。インストラクターの先導で漕ぎ進んでいった。

パドルを半分に外しハーリーの真似事をしながら漕ぎでいる子どももいた。後ろに乗っている支援員も一緒に掛け声をかけるなど、その雰囲気を一緒に楽しんでいた。

子ども達には後半に「宝探し」があると伝え、スタートした。どのようなものか細かくは説明せずに、探検をしているかのようなワクワク感があつた。カヌーを漕ぎ進めると、海水が中に入ってきて濡れてしまう。それを嫌がる子もいたが、支援員が後ろから、声をかけていると次第にその感触も楽しめるようになっていた。どうしても、海水や泡などが苦手な子は漕ぐことを止め、マングローブの奥には何かあるのかや水中にはどのような魚がいるのか想像しながらカヌーが進んで行くのを楽しめていた。

カヌーが終わる直前に橋が架かっており、その橋の上からパンなどが入った袋を保護者の方たちに下げてもらった。下げるタイミングは子ども達が橋に近づき、「何かがある」と気づけるタイミングを狙った。

宝物に気づき、手に入れることができると

子ども達はワクワクした様子で岸へと降りて行った。

2回目のカヌー体験では、用意した企画内容の「的当て」を主に楽しんでもらうために制作活動などはしなかった。

また、1回目とは違いあらかじめ子ども達に「今日のカヌーはミッションがあります。カヌーを漕いでいる途中で水鉄砲をもらって、的当てをします。」と説明をした。的当ては1回目に「宝探し」で宝物が下がっていた橋からの的を下げて水鉄砲で当てるものにした。

水鉄砲は的当ての為に水を入れ折り返り地点で手渡す予定だったが、先にもらった子が近くにいる子や支援員に水を掛けるなどしていた。そこから、水の掛け合いっこになり子ども達の関わり合いが多くなり、カヌーを漕ぐ競争へと変化している子もいた。

的当ての地点に近づいてくると、「水鉄砲用意して～！」と準備をしていた支援員の声が聞こえてきた。水の掛け合いっこで水がなくなっている子は掛け合いっこをした影響か、躊躇いもせずに海中に手をいれ水鉄砲に水を補充していた。

的当てでは的に当てると、景品が下りてくるといふ仕掛けも用意していた。的は固定されてはおらず、クルクル回ったり風に揺られたりと思わぬ動きをしていた。子ども達はそれを真剣な表情で狙っていた。

カヌー体験では、制作などは少なくし、また、カヌーに乗っている最中の仕掛けなども少なめに設定した。それは、カヌーに乗り景色や海水の感触といったものに触れ、それらから生まれてくる感情や反応、支援員や子ども達どうしの関わりなどを楽しむことができるようにとした。

歩く先を杖で突き足場を確かめながら歩みを進めていた。どうにか入ることができたが、始めのころは思いっきり楽しめてはいない様子であった。しかし、ほかの子ども達が楽しそうに泥で遊んだり、潜ったりして遊んでいるのを見ているうちに、泥んこにいることに慣れていった。そして、ほかの子ども達と一緒に綱引きをして楽しめることができた。

2014年の泥んこクルージングのときは、泥を嫌がったり不安そうな様子もなく作ったイカダに乗り（写真3）、支援者に引っ張ってもらったり、押してもらったりして楽しんでいた。泥んこクルージングが始まるまでは、クラフト作りやイカダ作りをしたがあまり気乗りしなかったのか「難しい。」などと言って何をどのように作ったらいいかわからないといった様子であった。しかし、泥んこクルージングが始まると、楽しんで遊んでいた。



写真3 2回目の泥んこ 作ったイカダに乗る (2014)

泥んこクルージングを楽しむことができたのは、2年前に体験しておりどのようなものかわかっていたから、初めての年は多少、不安などがあつたが一度体験したことで臆することなく楽しむことができたのではないか。

2 実際の様子（3名の児童生徒）

(1) 卒業生のT君

① 事例・泥んこクルージング

2011年の泥んこクルージングでは田んぼに入りはしたが、泥であるため濁りがあり底が見えないからか、不安がっている様子にも見えた。また、泥で汚れるのを嫌がったり、「怒られるかな」と気にしたりしていた。支援者も一緒に泥んこに入ったが、なかなか奥まで行けなかった。木の棒を杖代わりにし、

② 考察

T君は汚れたりするのが嫌いで、特に泥んこのような感触や濁った水で足元が見えない場所も少々苦手である。2011年の泥んこクルージングの時は支援者に促されてもなかなか入ることができずにいたが、支援者の手を取りながらや、杖を使いながらであればどうにか入れ、また、ほかの子ども達が泥まみれになりながら遊んでいる様子を見て徐々に警戒心が解れたのかと考えられる。そして、2年後

の2014年の泥んこクルージングでは1度経験していることなので、ある程度どのようなのか想像できたことで不安なども少なく楽しんで遊ぶことができたのではないかと。また、単純に経験しただけではなく、信頼のおける支援者がいたことや無理強いせず支援者が先に入り率先して遊び、T君の不安を間接的に軽減することができ、挑む心がわきでてきたのではないかと。

③ カヌー

2012年にはカヌー体験をした。キャンプの始めから「カヌーはいつから？」などと楽しみにしている様子であった。カヌーが始まると、始めのころは濡れたりするのを気にしていたが、次第に気にすることはなくなっていた。そして、水面に触れ感触を楽しんでいた。すると、段々と楽しくなってきたのか水面に触れるだけでなく、パチャパチャと自分の足に海水をかけたりし、頭から海水をかぶったりしていた。また、遠くから「ファイトー！」という声掛けに対して大きな声で「ファイトー！」と返していた。カメラ撮影をしていた支援者に向けて水をかけようとするなどの悪戯もしていた。「T！楽しいね！」と一緒にカヌーに乗っていた支援者が声を掛けると「先生！楽しいね。」と言っていた。カヌー体験が終わってからもテンションが高く、インストラクターに向けてのお礼の言葉やキャンプ全体の終わりのあいさつなど自ら手を挙げ率先して言っていた。

2014年に2回目のカヌー体験をした。カヌー体験の前に凧作りをした。凧に絵を描くのだが、何を描いたらいいかわからないとなかなか描き始めることができなかった。絵とは関係のない話をしていると、車や運転免許に興味がある様子であった。車の絵を描いてみてはどうかと提案すると、描きたいと意欲は見せていたが、描けない様子で支援者に手本を描いてみてと頼んでいた。支援者が簡単な車の絵を描くとそれを真似て書いていた。

凧上げをやり原っぱへ行き、支援者が「T！走って！」と言いながら凧上げをしようと、始めはのんびりと走っていたが、支援者につられるように思いっきり走っていた。何度も原っぱを支援者と一緒に凧上げをしなが

ら走っていた。疲れると座り込み凧上げはしなかったが、近くにいた別の支援者とお喋りをしていた。お昼ご飯の時間になり、担当の支援者はBBQを焼いていたためT君の近くにはいなかった。T君は浦崎先生やその他の支援者とお喋りをしながら食べていた。担当の支援者が少し離れたところで食事していると、隣に座り話をしたが、「浦崎先生と祭り（地元の祭り）の話してくる。」と言ってまた話をしに行った。その後も一人で別の支援者のところへ行きユンタク（他愛もないお喋り）をしていた。その様子をお母さんが見て「こんなしてるの初めて見ました。」と言っていた。確かに、T君は親しい支援者と話をしたり、自分の支援者と分かっていたら話をすることはあった。しかし、これまで自分から話す相手を求めて話をしたりすることはほとんどなかった。

カヌーが始まると、後ろに乗っている支援者の掛け声に合わせてパドルを操作していた。前はパシャパシャと海水の感触を楽しむ様子が見られたが、今回はなかった。支援者が後ろから水鉄砲で水をかけると、「先生、もっと。」と嫌がることはなかった。掛けるのをやめると「水掛けて。」と自ら要求していた。T君が水鉄砲を手にとると、近くをほかの子が通るとそのカヌーめがけて水鉄砲を掛けていた。しかし、その子が嫌がったりするとすぐにやめていた。同様に交戦してくる子とは楽しそうに水鉄砲の掛け合いをしていた。掛け合いの最中、後ろに乗っている支援者がT君に水鉄砲を掛けると仕返ししてきた。また、近くにほかのカヌーがない時などは前回のよう自分に水鉄砲を掛ける様子も見られた。やはり、水の感触は心地よく、楽しいのだろうと思われ、また、もっとほかの子とも一緒に掛け合いっこをしたいのだろうと思われた。

④ 考察

前述したように、T君は汚れることや濡れることが苦手である。第1回目のカヌーでは始めこそ、濡れることを気にしていたが、次第に海水に触るようになり最終的には海水をかぶるように自分に水をかけていたのは、苦手なものであるが、楽しい雰囲気や開かれた環境、実際に触れてみると心地の良い海水の

感触がT君の楽しい感情を引き出し、T君も存分に楽しみ、普段は出さないような大きな声が出たり、親しい支援者に対してイタズラをしたり、カヌー体験の最後にはインストラクターに挨拶をすることもできていた。自らに海水をかけ出したことは、多少苦手なことであるが、周囲の楽しそうな雰囲気をT君が感じ取り、そして、T君の中にも湧き上がってきた楽しいという気持ちの表現とエネルギーを自分に向けている様子であり、その行為が否定されることなく、「楽しいね」と他者に言語化されたことでT君の中にフィードバックされ自己表現となったのではないかと考えられる。T君が親しい支援者に向かっていたずらをする様子は、自分が楽しんでいることに周りの人も巻き込んで楽しみたいという気持ちの表れではないかと考えられる。このイタズラをするということは自らに海水をかけているときとは違い、楽しいという気持ちが外へと向かいだしているように見られた。最後にT君は挨拶を自ら進んですることができたが、以前のT君は何かしら自ら発表することや、全体の前に出て話すということは苦手であった。しかし、カヌー体験で濡れるという苦手なものを乗り越え、さらに楽しめことで次は発表という苦手な場面へチャレンジができた。これは、カヌー体験を通して『思いっきり楽しむ』ことで内に向いていた自分の気持ちが外へと開かれていったことで、自ら『発信』することができるようになったのではないかと考えられる。

2回目のカヌー体験のときには、自ら水遊びをすることはなかったが、支援者に水鉄砲で水を掛けられても、それを嫌がることはなかった。このことは、1回目に自分で水をかぶるようにして遊んだことで、濡れることに対して抵抗感が少なくなり、むしろ濡れることが楽しいという姿にも見られた。支援者が水鉄砲で水を掛けるのをやめると「もっと。」と要求していたことは濡れる感触の気持ちよさかと考えられる。そして、T君も水鉄砲を手にとると、横を通り過ぎていくカヌーに向かって水を掛けていた様子は、カヌー体験の前のお昼ご飯の時間に担当の支援者だけでなく、学生支援者にも自分から話しかけていた

り、複数人でお喋りをしていたことで、周囲の人も意識し、一緒に遊ぶという感情が起こったのではないかと考えられた。

(2) 小学生の顔、中学生の顔（A君の事例）

① どろんこクルージング

・2011年、小学生の顔のA君

A君は、2011年に初めて国頭キャンプを企画した時から4年続けて参加している。

2011年のどろんこクルージングでは、A君は小学5年生であった。

どろんこクルージングは、はじめに自分が乗る舟を作ることから始まった。A君は、同じトータル支援教室の仲間であるB君と一緒に舟を作った。B君はA君より2歳年上だったので、B君が年下のA君に舟づくりの主導権を譲ることが多く、A君のペースと構想に沿う形でふたりは舟づくりをすすめていた。B君は舟として浮かぶことを想定しながら丁寧に作ろうとするのだが、A君は自分のイメージする舟を「これじゃあ浮かばないよ。」とB君が苦笑いするのをものともせず、ダイナミックに作っていたので、だいぶ大雑把な完成度の舟ができた（写真4）。それでも完成した舟をうれしそうに眺め、舟に乗った自分を想像しながら楽しそうに泥の海まで運んだ。



写真4 船づくり（2011）

その頃のA君は、どろんこに触るのが苦手だった。そのA君が、解放された空間で気心の知れた支援者や仲間と一緒に活動だったからだろうか、はじめは躊躇う様子を見せていたが、泥の海に先に浮かべた舟にしっかりと体重をかけて乗り込んだ。舟は、見

た目を裏切らず、A君の体重ですぐに沈み、あっという間に段ボールとペットボトルの残骸になり果ててしまった。

A君は、沈没した舟と一緒に泥だらけになったが、泥んこだらけの自分に短い時間で慣れて、自分の好きな活動へとつなげて、どろんこクルージングを楽しんでいた（写真5）。どろんこの海にみずからダイブしたり、みんなと一緒に綱引きをしたりと、最後にはだれよりもダイナミックに活動していた。



写真5 泥んこを楽しむ（2011）

A君は、キャンプから帰る途中、母親に「楽しかった。来年もバーベキューして舟を作りたい。」と話していたそうだ。

キャンプから1カ月以上後の集団支援の時も自らキャンプの話題に触れ、「どろんこになって綱引きしたね。」と言ったり、箱庭で木を配置しながら、「キャンプの時は、T君がクワガタ持っていたよね。」等と話したりしていた。

・2013年、中学生の顔のA君

この年の舟づくりは、進行役の支援者が「浮かぶ舟を作るにはどうすればいいかな？浮かぶ舟を作ろうね。」と言ったので、A君は、はじめから舟を浮かべるためにと、用意された浮き輪をふくらませ、それに2リットルのペットボトルをつけて浮かぶための工夫をひとりで黙々としていた。2年前は、B君と一緒に作っていたので、ふたりの会話があたり、支援者に自分の作りたい舟の構想を話したりとはしゃぐ様子が見られたが、この時は、支援者が話しかけることに最小限の反応を見せるだけで静かに舟を作っていた。

完成した舟は、2年前と比べて浮かぶためのビニールが巻かれ（写真6）工夫がされていたので、浮く期待がA君にはあったかもしれない。



写真6 舟を浮かべてみたけれど（2013）

泥の海に着くと、インストラクターからの話の後すぐに舟を浮かべた。舟は、A君を乗せて僅かな時間ではあったが、しっかりと浮き、泥の海をすすんだ。しかし、1分も持たずに沈んだ舟に、「失敗です。」と言って舟を置いてその場を離れ、その後はイルカ型の浮き輪を支援者に押しもらったり、綱引きをしたりして楽しんでいた。

② カヌー

・2012年、小学生の顔のA君

A君は、以前にカヌーの体験をしたことがあったようで、カヌーに乗る前から早く乗りたいと楽しみにしていた。

しかし、いざ乗ってみると、A君と一緒に乗っていた支援者のこぐタイミングがうまくあわず、カヌーは思った方向にはなかなか進まなかった。何度こいでも思うように進まないカヌーに、A君は、とうとうこぐのをやめた。その上、カヌーの中にA君の苦手の海水の汚れや泡、べたべたした海藻などが入ってきたため、A君は、指定された場所に座っていることができず、座席から出て海藻や泡に触れない前のほうにあぐらをかいて座った。前のほうに座るとバランスが悪くカヌーが大きく揺れるので、A君は、座ったままパドルをこぐこともせず、顔を吹き抜ける風と周りの景色を眺めて時を過ごしていた。

折り返し点をまわった後、前方に橋が見えた時、支援者が「橋のところで宝探しができるって。」と話しかけると、それまで大人しく座っていたA君が。「宝探し？早

くやりたい。」と目を輝かし、ふたたびパドルを握ってこぎ出した。しかし、やっぱりうまくこげないので、パドルをこぐのはすぐに諦め、また、あぐらの上にパドルを置いてじっと座っていた。だが、「先生、早く端のところに行こう。」と支援者に早くこぐよう促し、宝探しを心待ちにしている様子だった。

いよいよ橋のところに来ると、両手を広げ、「僕のと先生のとふたつ取るね。」と言ってふたつの袋に手を伸ばしたが、「取るのはひとつだけだよ。」と支援者が声をかけるとひとつだけ取っていた。宝探しの時のA君は、うれしそうだった。

A君は、カヌーが終わった後の感想発表の時、「橋をくぐったのがうれしかった。」と話していた。

③ 2014年、中学生の顔のA君

カヌーに乗る前、乗ることを楽しみにしていた小学生の時と異なり、少し緊張した面持ちのA君だった。

カヌーに乗った後、以前の経験とインストラクターの漕ぎ方レクチャーをしっかりと聞いていたこともあり、前進するのは上手だった。しかし、方向転換や停止は勝手がわからず、同乗した支援者がリードしていた。支援者とのこぐタイミングが合い、前進がスムーズだったので、前回は、終始最後尾だったのに、今回は、インストラクターを追いぬいて一番前に出ることもあった。

思いがけずインストラクターも追いぬいて前に出た時は、少し不安な様子で「どこに行く？」と問いかけることもあった。

2013年のどろんこクルージングの時に、キャンプ場のインストラクターと親しくなったことが影響していたのか、今回のカヌーの時もインストラクターと仲よくなって自分から話しかける場面がよくみられた。カヌーに乗っていない時もインストラクターに水鉄砲の水を入れてもらったり、水をかけて遊んだりする様子が見られた。水をかけられ、「冷たい！」とはしゃぐ場面もあり、中学生になってから、トータル支援教室で携帯のゲームで遊ぶ姿がよく見られるようになっていたA君が、携帯ゲーム以外で遊ぶ姿は意外だったとカヌーで

ユニットを組んだ支援者が話していた。

カヌーの最後のイベントである“戦闘中”の時も水鉄砲で冷静に的を狙い、しっかりとお土産をゲットしていた。

④ 考察

5年生の頃までのA君は、人の名前を覚えるのにはあまり興味がないうで、自分に特別関わりのある人以外は名前を覚えていなかった。

トータル支援教室では、接触する機会が多い個別担当の支援者の名前は覚えるが、半年ごとに入れ替わる集団支援の学生の名前や自分以外の子どもの担当者の名前はなかなか覚えなかった。集団支援の時に学生の名前を呼んでいても次の活動で同じ学生に「名前なんだっけ？」と聞いていたのである。それが6年生の前半から少しずつ変わり始めた。よく顔を合わせ、話をする学生の名前を覚えるようになった。

A君が学生の名前を覚えているとはっきりわかったのが2回目のキャンプの時である。キャンプに自分が知っている学生支援者が参加しているかを聞いたのを見て、A君は、キャンプの活動を楽しむだけでなく、一緒に参加している他者との関わりも楽しみにしていたのだということがわかった。

中学生になると、A君は、相手によって話す内容を変えたり、話す時間が変わったりする様子が見られるようになった。小学生の頃までは、自分と親しくしている支援者によく話しかけるようになってはいたが、それ以外の他者が話しかけてもそこまで異なる対応はあまり見せていなかった。

それが、中学生になってからは、傍で見ていると親しい相手とそうでない相手がすぐわかるくらい対応に差をつけていた。

この4年間のキャンプでのA君の人への対応の変化は、5年の歳月を経て、トータル支援教室がA君にとって安心できる場であるとA君自身がわかるようになり、自分の安全が守られる場でA君の人との関わり方を成長させたと感じられる一面であった。

4年間のA君の活動をふり返って、A君は、十分キャンプの企画を楽しんでいた。

1回目のキャンプは、初めて大学の構内を

離れた野外活動であったことと、A君が好きな料理や舟造り、あまりルールがなく自分がやりたいようにできる企画ばかりだったので、活動が終わっても記憶に残り、何度も再現行動をしたり、家族や支援者に話したりしていた。

2回目のキャンプは、A君の苦手なバランスを取る活動だったり、ルールがあり、他者と共同でタイミングを合わせたりする活動であった。

そのため、一見みるとうまく参加できていない様子も見られたが、その企画のどれもA君は、自分がどうすれば楽しめるのかを考え、自分なりの参加をしていた。

3回目のキャンプは、前に失敗した自作の舟でのクルー人のリベンジだった。支援者から見れば、水に浮かび短い時間ではあったが浮いていたので十分リベンジできたと思ったが、A君は「失敗だ」と評価した。前の時は、すぐに沈んでも楽しかった思い出が残っていた事を考えると、自分の行動を少し客観的に見られるようになっていてることを感じさせる発言だった。

4回目のキャンプは、苦手だったボディバランスを取ることを要求されるカヌーで、支援者と呼吸を合わせて前進することができたことは、A君が、他者を意識して行動できるようになったことを示していた。

この4年間のキャンプで、A君は、自分だけで楽しむ活動から、他者と関わりながら楽しむ活動へと成長を見せている。また、他者との関わり方も、みな同じような関わり方を見せていた初回のキャンプと比べると、相手を選んで会話を変化させ、どの話題で会話すると自分が楽しめるのかを意識できるようになっている。

(3) ハーリーが好きなS君

① 大玉サッカーでまねる

サッカーボールは、大きなバランスボール。S君は、そのボールを右足で上から押さえるように止め、指さしをしながら合図をしている。サッカーの試合を作戰しているようなしぐさである。

② すいかを分ける

すいか割りには、周りの誘導の言葉に合わせ、

割ることができた。友達の番になると「左、左」と大きな声でアドバイスする。その後、割れたすいかを切り分け、周りに

いる人達に配って歩いた。大人、友達と周り、ビデオ撮影している学生にも勧める。

③ カヌーでハーリー

カヌーに乗り込んですぐ、S君は、パドルを半分にしたいと言ってきた。

「あけみ先生（しえーしえ）。1つにした～（い）。2つは、でき～（ん）。」と話してくるが、何のことか分からずにいた金城におかまもなく固定されたパドルをはずし、半分をカヌーに載せ、半分になったパドルを両手に持ち、右側の海水を漕ぎ出した。その様子を見た金城は「ハーリーみたいだな～（笑う）すごい～」と、声をかける。「S君、ハーリーしたことあるの？」と聞くと首を横に振った。金城は、経験ではない動きに驚き「やったことないのに上手だな～」と褒めた。

途中、2つに分けたパドルを1本に繋ぎ、漕ぐ体験をした。S君にとってはパドルが長い。頭の上まで両手をまっすぐ伸ばし、掲げ上げ、次に片方の手を極端に曲げる動きをしてやっとパドルが海水に届く。小柄なS君は、その動きを数回やった後、パドルを2つに分け、ハーリーの動きで漕ぎ出した。

カヌーでのS君は、大きな声が多く、金城への指示が何度も出た。「あけみ先生、もっとはやくこいれ（で）～。あ～ぶ（つ）かる～」といいながら、持っているパドルを海水から引き上げる。体を右左にくねらせたかと思うと、急に仰向けになり、後ろの席にいる金城を見る。しばらくは仰向けに青空をながめ、体を起し、パドルをハーリーのように漕いだ。

ちょっと離れた所に他のメンバーのカヌーがあるが、大きな声に対しての返事はない。金城も小さな声で「ほんとだ。あぶな～い」とつぶやく。S君は大きな声で「もう、ほんとにちゃんとこいで」と金城を指示する。近くにいるカヌーからの返事は聞こえない。帰りは、2人で「ハーエ（イ）ヤ～、ハーエ（イ）ヤ～」の掛け声をする。

橋の下にぶら下がっている宝もの袋を取る時も大喜びで金城を指示する。S君は大きな

声で「もう少しこっちこっち、ああ行きすぎ～」とカヌーを漕ぐ金城に指示する。S君は、宝ものを取った後もハーリーごっこが続き、半分のパドルのままゴールする。

④ 考察

普段の生活でも、友達と木登りやサッカーをする小柄なS君だか、なかなか他地域の子どもの交流体験がないS君にとって国頭地区トータル支援での体験は楽しいものであったようだ。サッカーをする相手がいて、スイカを配る相手がいた。体よりも長いパドルを半分にし、ハーリーのように一緒に漕ぐ相手もいた。相手のいる居場所で湧き起こったイメージはサッカーの試合であり、ハーリーであった。

スイカを割った喜びは大きく、その後の配布姿に繋がっている。S君の喜びの表現が自分から配って廻る姿を引き起こしたのだろう。

カヌー準備の段階で半分になっていたパドルを見ているS君。パドルを半分にしたのは、自分の体より長いパドルを使いやすくするためであろう。ところが、パドルを手にした瞬間の持ち方がハーリーに繋がった。これまで見たり聞いたりした経験があるのか、ハーリーのかげ声が生き生きと表出されることに繋がっている。青い海と青い空の下、自分にできるハーリーがうまくいっていることを実感したS君は、カヌーの上で仰向けになり空を眺めて穏やかになった。自然にひたる感覚を味わっている。

S君のハーリーは、地域行事のハーリーに似ている。S君は地域のハーリーを想像したのか自分からパドルをはずした瞬間、S君の主体は、あそびに吸い込まれた。ハーリーごっこあそびとして表現されている。

その後、地域での友達とのやりとりで使われる言葉を遠慮なく表出させていた。あけみ先生への指示が続く大きな声は、普段の学校ではあまり見られない。興奮したような声に対して、近くにいるはずの他のメンバーは静かにしている。一緒にいる金城も鎮まるのを待つように小さな声で同意し応えている。自分から出すS君の大きな声は大自然が吸収している。S君の大きな声と言葉は、上唇が動き、顔を大きく動かすことになる。発音する

のに苦手な言葉も上唇や顔の動きと共に発声している。喜びの感情が上唇と顔を動かし、喜びの表情となり、発声となっていた。

10月に感想画と文章を描いてもらった。2つの手が海まで伸びる表現が楽しさを感じさせる。「また～やりたいです。」という繰り返しの表現文に楽しかったことが感じられる。

IV 総合考察

1 海・人・友達とかかわることで他者（外界）に向かう力

T君は、水に濡れることやどろんこの感触などが苦手で、キャンプでの企画のような場面で自分から能動的に活動することは少なかった。

しかし、信頼のできる支援者とのユニットで参加した企画での楽しい雰囲気や開かれた環境、実際に触れてみると心地の良い海水の感触がT君の楽しい感情を引き出した。カヌー体験での支援者だけでなく、自分にも海水をかけるという行為は、T君の中にも湧き上がってきた楽しいという気持ちの表現とエネルギーを自分に向けている様子である。そして、自分が濡れ、他者も濡れされるという行為が否定されることなく、「楽しいね」と、海水をかけられた他者に、自分の気持ちを言語化されたことで、T君は、海水を浴びる感触を楽しみ、その海水を媒介として周囲の人も巻き込みながらカヌー体験を楽しんだ。この体験により、T君の主体がより外へと開かれ、人前で意見を言うことが苦手なT君が、自分から終わりの挨拶をするという行為に繋がった。

つまり、ユニットでのカヌー体験を通して、安心できる状況で『思いっきり楽しむ』ことで、内に向いていた自分の気持ちが外へと開かれて、自ら『発信』するということができるようになったことが考えられる。

4年間のキャンプでのA君の人への対応の変化は、5年の歳月を経て、トータル支援教室がA君にとって安心できる場であるとA君自身がわかるようになり、自分の安全が守られる場でA君の人の関わり方を成長させたと感じられる一面であった。

この4年間で、A君は、自分だけで楽しむ活動から、他者と関わりながら楽しむ活動へと成長を見せている。また、他者との関わり方も変化を見せ、相手を選んで会話を変え、どの話題で会話すると自分が楽しめるのかを意識できるようになっている。

A君は、自分の海のイメージをしっかりと内に持ち

れること、「海」を遠くから眺めることを広義の企画として捉えることができる。

このように、「海」の企画は、子ども達が狭義にも広義にも活動することができる幅広い企画、ストライクゾーンの広い企画なのである。ストライクゾーンの広い「海」の企画は、海が大好きな子ども、水にさわるのが苦手な子ども、そして、集団での活動が苦手で、支援者とのユニットで活動を楽しむ子どもと、いろいろな実態の子ども達が達成感・所属感を感じやすい。

そして、企画に参加することで得られた達成感・所属感は、子ども達が成長していく過程の中で、社会で生きる力、社会で自らを活かせる力につながる事が考えられる。

このように、海の企画は、子ども達の他者や新しい場と関わるときの苦手意識のハードルを下げ、ものへ人へ場へと向かう力を引き出しやすいのである。

向かう力を得た子ども達は、同時に、ものを人を場を受け止め、向かう力と受け止める力が相互に作用しあうことが、子ども達の中に企画との関わり方、人との関わり方を変える気持ちを育む。

「海」企画を通して見るトータル支援教室は、ありのままの自分でいい場を子ども達に提供することで、子ども達の潜在する生きる力、そして、他者へ、社会へと向かう力を育み、同時にそれらを受け止める力を得る一助となっている。

引用文献

- 久志峰之 大城麻紀子 金城明美 浦崎武 (2013)
沖縄の自然環境を活かした国頭地区トータル支援—
主体的に動き出すための支援— 琉球大学教
育学部附属発達支援教育実践センター紀要第4号
P97-P103
- 久志峰之 大城麻紀子 金城明美 浦崎武 (2014)
海をテーマにしたトータル支援教室の取組を通し
て 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践セン
ター紀要第5号, P59-P68
- 浦崎武 武田喜乃恵 瀬底正栄 崎濱朋子 金城明
美 大城麻紀子 瀬底絵里子 久志峰之 (2013)
発達障がい児への他者との関係性を基盤とした集
団支援—TSGにおける自閉症スペクトラム児に対
する直感的心理化への支援— 琉球大学教育学部
発達支援教育実践センター紀要第4号, P79-104
- 浦崎武 武田喜乃恵 瀬底正栄 崎濱朋子 金城明
美 大城麻紀子 久志峰之 本間七瀬 運道恵里

子 (2014) 自閉症スペクトラム障害児・者の他者
へ〈向かう力〉と〈受け止める力〉の相互作用—
TSGを通じた〈能動—受動〉の相互作用に関す
る支援教育論的検討— 琉球大学教育学部発達支
援教育実践センター紀要第5号, P1-P10